

■ 7-JP 当院におけるNEWS導入経験 -- NEWSにて安全に施行し得た胃
炎症性筋線維芽細胞性腫瘍の1例
A case of Inflammatory myofibroblastic tumor treated by "NEWS"

代表演者：柿沼大輔（日本医科大学消化器外科）

Speaker: Daisuke Kakinuma, M.D., Department of Gastrointestinal Hepato-Biliary-Pancreatic Surgery,
Nippon Medical School

共同演者：後藤修 2)、藤田逸郎 1)、金沢義一 1)、松野邦彦 1)、吉田寛 1)、樋口和寿 2)、貝瀬満 2)、
岩切勝彦 2)

所属施設：日本医科大学消化器外科 1)、同消化器内科 2)

症例は39歳男性。主訴はなし。検診EGDSにて2016年から穹窿部に20mm弱のSMTを指摘。経過観察されていたが2018年の定期検査にて増大傾向があり、当科紹介となった。

当院で施行したEGDSでは胃穹窿部前壁に20mm大のSMTを認めた。やや発赤あり、中央部にはわずかに陥凹を認めた。EUSでは第4層と連続したやや不均一な低エコー域として描出された。腹部造影CTではやや造影効果の強いわずかに肥厚した胃壁を認めるのみで所属リンパ節の腫大や遠隔転移を疑う所見を認めなかった。FNAでは平滑筋腫との診断であったが、増大傾向のあるSMTであることから切除の方針となりLECS(NEWS)を施行した。

当院でのNEWS導入第1例目であり、術前に消化器内科、手術室看護師、麻酔科と入念に討議を重ねたのちに、手術を施行した。術中所見は、穹窿部前壁漿膜に漿膜浸潤を疑う所見あり、同部中心に大弯を処理し授動したのち胃内腔側よりムコアップ注入し、漿膜側より全周性に漿膜切開を加えたのちに漿膜筋層縫合を行った。途中スパーサーを挿入し腫瘍を内腔に突出させたのちに縫合を完成させ、内腔より全層切開を完成させ経口的に標本を摘出した。

周術期は問題なく経過し第6病日退院。病理では筋線維芽細胞の特徴を有する紡錘状細胞の増殖と炎症性細胞の著明な浸潤を認め、炎症性筋線維芽細胞腫瘍(IMT)との結果であった。IMTの好発部位は肺や腸間膜、大網などといわれている。胃に発生することはまれであり、NEWSにて切除した報告はないため、多少の文献的考察を含め報告する。